

## 座談会

## はじめの一歩 S O L S 座談会

開催日時 2024年4月16日(火) 20:00～

### SOLS 参加メンバー

司会：山田 葉奈(順天堂大学三年生) (以下、山田)

小池 菜織(順天堂大学三年生) (以下、小池)

伊原 彩華(群馬ペース大学二年生) (以下、伊原)

中平ひより(群馬医療福祉大学三年生) (以下、中平)

アシスタント：八木喜久子(株宇宙堂八木書店) (以下、八木)

### はじめに

少子化が社会問題とされるようになってから、毎年毎年、わが国に於いても、出生率の低下が叫ばれ、世の中はどんどんIT化が進み、「ITに負けない職種は何だろうか?」と若者に問いかかれても即答できない昨今、己の仕事に情熱を傾け、世の中を背負って立つべく、日々精進している若者たちの存在は、社会にとってとても有難く、貴重な存在である。

医療業界と一口に言っても、職種は様々、医学の世界に身を置くプロフェッショナルでさえ、「こういう職種があったのか!」と驚かれる事もあるほど、細分化された領域は、なかなかわかりづらい。

そこで、弊社としても、微力ではあるが、将来医学の道に進んで行こうという学生さんたちの団体「SOLS」さんにお声をかけさせていただき、みなさんがどんな思いで、医学の道を目指していくらっしゃるのかなどを、座談会という形式で語つていただいた。

これをひとつの契機として、今後、弊誌にいろいろな企画を試みていこうという、第一歩目であるので、着目いただければ幸いである。

\*\*\*\*\*

八木：学生の皆さんには医学の道を志していくらっしゃるということで、弊社のスタッフも医学論文などには近い位置にいますが、こちらは素人ですので、不勉強な言葉が飛び出しましたらご容赦ください。

今回の座談会ですが、山田葉奈さんが司会をされるということですので、お任せいたします。よろしくお願ひいたします。まずは、臨床検査技師を目指したきっかけからでしょうか?

山田：はい。内容が三つあります、ひとつは臨床検査技師(という職種)を知ったきっかけ、次に、数ある医療職の中で臨床検査技師をなぜ選択したのかという理由、三つ目が大学入学前と入学後のギャップについて、この三本立てでお話しできたらなと思っています。

八木：はい、では、お願ひいたします。

山田：わかりました。ではまず、臨床検査技師を知ったきっかけについて、みんなにお話ししていただきます。まずは、小池さん、お願ひします。



### テーマ①

#### 臨床検査という職業を知ったきっかけ

小池：順天堂大学で、今年から三年生になります、小池菜織と申します。よろしくお願ひします。

臨床検査技師という職業を知ったきっかけは、母です。実は、高校三年生の夏ごろまでは、医療

関係の職業に就くということは考えておらず、教職員への進路希望を考えておりました。ところが、当時の担任の先生と何回か面談をした時、「教員ではなくて、違う仕事、違う道が向いているのではないか?」という話



になり、それでどうしようってなった時に、将来は好きな生物を活かした仕事に就きたいと思って、その時に生物の道に進むことを考えました。そして、自宅から一番近かった大学に理学部生物科があつたので、話を聴きに行ってみました。その大学の教授の先生から「何の研究をしたいの?」と訊かれ、そこで初めて、“生物”と一言で言つても、人体系、植物系、動物系、微生物系、さらに細菌系など、たくさんの分野があることを知つたのです。

「生物学の分野は、大きく分ければ3つくらいの柱に分かれてるけど、あなたは何を調べたいの?」と先生に訊かれて、私は、“人体”に興味があると感じたので、家に帰り、改めて、生物、人体、医療などを絡めて、仕事をすることができる職業はあるのかなと考えていたら、母が「臨床検査技師というお仕事があるのよ。」と教えてくれたのです。そこで「臨床検査技師」に着目してみると、まさに「やりたいと思っていた仕事」だと感じて、目指してみようと思ったのです。

山田：なるほど、ありがとうございます。お母様は、臨床検査技師にお知り合いがいらしたのですか？

小池：いえ、そうではないのですが、栄養関係の仕事だったので、生物に関しても勉強する機会があつたので、多分そこで知つていたのではないかと思います。

山田：今、一番やりがいを感じていることはありますか？

小池：私は、高校生の頃から、学校の授業が全部、生物だったらしいのになあってずっと思つていたので、この大学に入って、ほとんどの授業が生物に関連したものなので、とても楽しいです。自分のために勉強しているっていうのは当然なのですが、将来プロになった時に、自分が関わつてゆく患者さんのためにもなつて、勉強の成果が、患者さんの治療に繋がつてゆくかもしれないというところが、一番魅力的だなと思っています。

山田：小池菜織さん、ありがとうございました。では続いて伊原彩華さん、お願ひします。

伊原：はい、よろしくお願ひいたします。群馬パース大学二年伊原彩華と申します。

私も、実は皆様と同じように、最初から医学の道も、臨床検査技師も目指していたわけではありませんでした。子供のころから、絵を描くのが好きで、美術の道に進もうと思い、美大受験を目指していました。

受験のために、画塾に通い、デッサンなどを学んでいたのですが、高学年になるにつれ、世の中の現実がぼんやりと見えてきた時に、“絵一本で生活できるようになるのって難しいんだろう”と思い始め、地に足をつけて生きていくためには、どうすれば良いのかと考え始め、小学校高学年に進路を“医療従事者”に変更しました。臨床検査技師という職業を知つたきっかけは、実はよく覚えていないのですが、私は幼少期から病弱で、病院通いが多く、医療従事者がとても身近な存在だったのです。

なぜ臨床検査技師を目指したのかの部分でお話ししようと思います。

病院に通うことが多かった経験上、例えば「血



「液検査」などの「検査をする人」の存在は認識していたはずなのですが、あくまでも「病院の人」というくくりで認識していたので、進路を真剣に考える段階になって、初めて「臨床検査技師」という職種を意識したと思います。

山田：伊原さん、ありがとうございました。では続いて、中平ひよりさん、お願ひします。

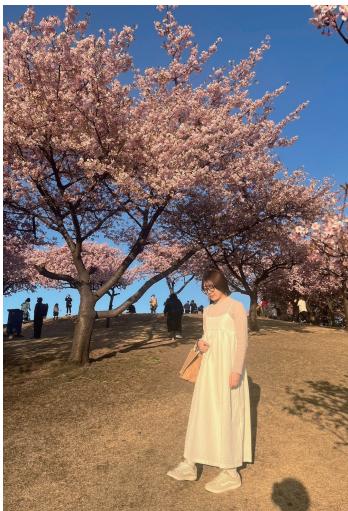
中平：はい。群馬医療福祉大学三年の中平ひよりと申します。まずは、医療職を目指したきっかけから。私は、中学二年生の時に、病気で、三か月くらい、長期入院した経験があります。

多感な時期に長期入院するというのは、精神的にも身体的にもかなり負担が大きく、気分的にもどん底のような状態で、本当に辛かったのです。そんな時、看護師さんだったり、お医者さんだったり、リハビリの理学療法士さんだったり、様々な医療従事者の方々が、私を温かく支えてくださり、どん底から立ち直ることが出来ました。その経験から、私もまた、誰かを支える仕事を目指したいという思いが芽生えて、退院して、高校生になってからもずっと、医療職に就くことを頭に勉強してきました。

それでも、まだ、「臨床検査技師」という職業は知らなかったのですが、たまたま地元の大学に「臨床検査学」を学べる学部があったので、気になって、少しづつネットなどで情報収集し始めました。臨床検査技師が、どんな仕事をするのかを調べてゆく中で、「顕微鏡」を使ってなにかを調べたり、観察したりするという役割があることを知りました。

山田：顕微鏡がお好きなんですか？

中平：はい！顕微鏡で何かを観察するというのが



とても好きで、顕微鏡を扱う授業があると、誰よりも顕微鏡で長く観察していました。例えば細胞を観察していて、動物の形に見える細胞とかを見つけた瞬間が自分でテンション上がって楽しくて、そういうことがお仕事になるなら、良いのではないかと先生にもお勧めされて。

山田：ありがとうございました。ではこのテーマの最後ですが、私は小池菜織さんと同じ順天堂大学三年生の山田茉奈と申します。臨床検査技師を目指したきっかけは、私もよく覚えていないのですが、幼稚園の頃に、長期入院した経験があって、医療職というものを身近に感じていたので、小学生の頃から、「医師になりたい」という夢がありました。高校二年生くらいまでは、ずっと医学科を志望して勉学に励んでいたのですが、勉強を続けているうちに、「このまま医学部を目指していいのかな。」とふと迷う気持ちが湧いてくることがあって、自分のやりたいことが本当にこれなのかなと、紙にいろいろ書き出してみたり、自分自身と向き合うための時間を作つてみたり試行錯誤しました。

そして、自分のやりたいことと、実際の医療の現場を重ねて考えてみた時に、どうも医学科ではないような気がして、自分が本当にやりたいことが出来そうな医療職を模索し始めました。そんな時、地元の大学に検査学科というのがあると知つて、オープンキャンパスに行ってみたり、HPから情報収集を試みてみたりして、「臨床検査技師」という職種があることを知りました。そして、飛び込む先が医学科から検査学科に変わったわけですが、学生になると、授業の過程で課題があるじゃないですか。その課題をクリアすると、次の課題が来るのが待ち遠しくて。私は、課題を与えられると、すぐに手を付けたくなるタイプなので、どんどん課題をクリアしてゆくのが楽しくてたまらなかつたりします。

## テーマ②

### 医療職のなかで、なぜ「臨床検査技師」を選択したのか？

山田：では、内容が被るかもしれません、次のテーマに移りたいと思います。順番は同じで、まずは小池菜織さん、数ある医療職のなかで、なぜ検査技師を目指したのか、お願ひします。

小池：はい。先ほどもお話ししたんですけど、私は生物がとても好きだったので、医療職のなかでは生物（細胞）と一番関わりがあると思ったので、臨床検査技師を選択しました。具体的に言うと、医師という職業も、確かに研究内容としては、生物メインだとは思うのですが、「検査」とか「研究」という分野のスペシャリストで、より生物に近い位置にいるのが、臨床検査技師なのではないかなと思い、選んだ次第です。加えて、顕微鏡を使って研究するということにも魅力がありました。

山田：実際、この道を選んでみていかがでしたか？

小池：臨床検査技師の存在って、当たり前に理解されていると思っていたのですが、高校の時、生物選択のクラスに居て、クラスメイトは皆、医療系の道を目指しているにもかかわらず、臨床検査技師という職種があることを知らない子が多かったです。クラスの中で、臨床検査技師を志望していたのは私だけでした。友人からは「リンショウケンサギシって何？」と訊かれることも多かったですし、未だに理解していない子も多いから、恐らく、この世界を目指す人達は、結構、孤独な闘いをしてきたのではと思います。

山田：確かに、私の周りでも、臨床検査技師を目指している人は少なかったですし、知っている人の方が珍しいという感じではありました。まだまだ知名度がね・・・さて、次は伊原彩華さん、お願ひします。

伊原：はい。医療従事者を目指す気持ちが本格的になってきたのは、あるTVドラマがきっかけでした。当時フジテレビで放送されていた「コード・ブルー」という、ドクター・ヘリが活躍するドラマなのですが、このドラマを観た瞬間、すごく惹かれてしまって、「私もいつか、フライトナース

としてドクター・ヘリに乗る！」って思ったのですが、私、喘息がありまして、看護師の仕事に要求されるに見合う体力が自分には足りないかなと。今はだいぶ喘息も良くなって来ているのですが、当時は、夢を断念せざるを得ない状況でした。大学進学を考える際、中学生の頃から親からは「地元の栃木県内の大学なら進学して良い。」と言われていました。

当時は看護師を目指していましたので地元の大学に進学する方向でよかったですですが、進路を臨床検査技師へ変更せざるを得なくなったりとき臨床検査技師養成コースがある4年制大学が当時は栃木県にありませんでしたので親と大喧嘩になりました。それでもどうしても、医療の世界の奥深さに惹かれてしまって、臨床検査技師になりたいという思いが譲れなかつたため、両親を必死で説得して、かつ自分自身をもう一度見つめなおして、本当に自分が学びたい道はどこなのかと。自分が医療職に就いて、自分の夢を叶えられることが本当に出来るのかと。そうして考えると、自分は、体力はないけれど、探求心が旺盛で、物事をとことん突き詰める性格を持っているからその強みを活かすために一旦、臨床検査技師の養成校に通い、技師の資格を取ってから、研究職を目指すという方向で頑張ってみれば良いのではないか、という結論に至りました。

山田：ちょっと凄すぎて言葉が出ないです。かっこいいです。では、中平ひよりさん、お願ひします。

中平：私がなぜ臨床検査技師を選択したのかまず結論から言うと、自己分析の結果なんです。私はもともと看護師を志望していた時期があって、その理由としては、患者さんと関わる機会が多い。患者さんを一番支えられる医療職は医者か看護師だと思っていて、自分が患者さんとコミュニケーションを取ることで、患者さんが元気になったら嬉しいとか、そういう思いがあったのですが、それを変えるきっかけが、浪人期だったんです。私は1浪しているので、周りの人よりも、1年多く勉強しながら、将来について考えるモラトリアムな時間があり、勉強と同時進行で自己分析をして

いました。そんな自己分析を続けていく中で、「目指すは看護師じゃないな。」とふと思うことがあります。看護師か臨床検査技師かで揺れている自分がいたのですが、改めて、自分が「何を好き」で「何が嫌いか」という部分に焦点を当てて考えてみると、自分の手作業で仕事の成果をあげる、「作業職」と言われている臨床検査技師が、自分の性格に合っているのかなって気づきました。ちょっとと言いうらいことなのですが、職種として「知らない人と関わる機会の少ないのが特徴」という部分にも魅力がありました。私は自ら初対面の人と上手にコミュニケーションを取れるタイプではないので、今こうやってお話をしているのも、結構緊張しながら恐る恐るしゃべっています。それを考えると、看護師より臨床検査技師かなという答えになりました。

山田：はい、ありがとうございました。2つ目のテーマ、最後は私です。先ほど高校二年生まで医師を目指していたというお話をしましたが、それは、私を救ってくれた医師に対して子供の頃から、憧れを感じて、医師への道を自分も目指していましたという感じだったのですが、いろいろな情報を得ていくなかで、違和感を覚えるようになりました。医師は診断や治療に至るまでのプロセスを重視するのではなく、他のコメディカルの方たちが持ち寄って検査した情報を総合して合わせて考えて、最後の診断治療につなげていくと思うのですが、私がやってみたいことは、医師の診断や治療に至るまでのプロセスで、患者さんの病気を「見つけること」で、最初は、病理分野の「細胞検査士」に着目していました。病理だと、患者さんの例えれば異常細胞を発見して治療に直接繋げていくことが出来るのではないかと。身近に、がんで亡くなっていく方が多かったこともあり、病理の道に行くことで、一人でも多くの命を救うことができたら良いなという思いがありました。今は、勉強も進んで、さらにいろいろな知識が増えて、細胞検査士に限らず、診療における「縁の下の力持ち」のようなポジションのお仕事があることがわかつたので、「臨床検査技師」を目指しています。

八木：なるほど。皆さん、医療業界を意識してい

ても、最初から臨床検査技師を目指していたわけではなかったのですね。

山田：医療ドラマで、フランチャイルというドラマがあって、検体検査した後に、ドラマなので誇張表現もあるかと思うのですが、医師に対して「これはこうじゃないでしょうか」ってはっきりものを言える技師が、それこそ医療チームの一員として戦力になるし、かっこいいなと思って。プロとして意見をちゃんと言える、そういうふうになりたいと思います。

八木：検査の世界を勉強し始めて、ああもう嫌だなって思ったことはありますか？

山田：私はあんまりないかもしれないですね。なんかこう悩みに悩んだ結果、臨床検査学科にたどり着いたので。（ここに来る前の）勉強で嫌だなって思ったことは少なからずあるんですけど、この学校で検査の勉強をし始めてから嫌だなって思ったことはなくて、全てが楽しいなっていう感じで取り組めているので、「ここで勉強できること」がモチベーションになっている気がします。

八木：私のイチ推しはこれだっていう検査はありますか？

伊原：私は今二年生で、医療系の四年生の大学だと、一年生の前期にまず教養科目を高校の延長線上みたいな感じで詰め込んでから、解剖とか生理とかで人体の基本を学んで、それから「検査学」と名の付くものに本格的に取り組み始めるのは、早く一年生の後期～二年生からなので、私もまだ、全部の検査についてよく知らないんですけど、細胞診には興味があります。絵を描くのが好きだということも関係しているかもしれません、細胞を「視覚的に捉える」のが、臨床化学みたいに「数字から読み解く」よりも興味が湧くので、病理学が一番楽しいかなって。

山田：全部の科目が好きで、ひとつに絞れない人も結構多いのではと思いますが、中平さん、どうですか？ 割と専門の勉強は終えたあたりかなと思いますが。

中平：私はもともと生理学がとても得意で、一年生における最大のモチベーションが生理学の授業だったんです。それで三年生で、生理機能検査学つ

ていう科目があるんですけど、そこでエコーの勉強ができるカリキュラムが組まれていて。私は将来、超音波検査士を目指しているので、まだ授業は二回しか受けていないのですが、冬の授業でもやるみたいなので今から楽しみです。

山田：超音波のどういうところに魅力を感じますか。

中平：やはり、自分で当てた部位がそのデータとして可視化できるっていうところがすごく魅力的だと感じます。これもまた入院経験に関係していくのですが、私は消化器系、特に胃腸のあたりがもともと弱くて、幼い頃から消化器のエコーを撮り続けていたため、超音波検査機器というものが私にとってはとても身近な医療機器だったので、超音波検査士もいいなと思っています。

山田：小池さん、何かありますか？

小池：私も、本当に全部の教科が好きなので、特にこれと絞れないのですが、「メカニズム」、これがこうだからこうなる、という過程を追いかけるのが本当に好きで、三年生になって研究室選びが始まりましたが、悩んだ末、4月から「臨床化学分野」を選択しました。正直、臨床検査に関わる全ての分野が大好きで、本当に迷いつつ、それでも頑張って選んだ結果です。

### テーマ③ 入学前と入学後のギャップについて

山田：皆さん、人それぞれの過程を辿っていて面白いですね。それではここで、最後、3つ目のテーマに移りたいと思います。少し大雑把なくくりになりますが、入学前と入学後で感じたギャップはありますか？小池さん、お願ひします。

小池：私は大学に入るまでは、臨床検査技師というお仕事が、就職先によって仕事内容が細かく分類されるのを知らなかったので、大学で学んだこととか必要なことすべてを就職先で行うものだと思っていたのです。例えば、就職先に大きな病院を選んだ場合、輸血だったら輸血・・・みたいなセクションでそれしか行わないという環境になるので、勉強している今のうちに、自分が将来「絶

対にやりたい分野」に的を絞っておかなきやいけない面もあるんだな、というのをギャップとして強く感じました。

山田：ジェネラリストだったらなんでもいい、という感じにはなりたくないですよね。では次、伊原さん、お願ひします。

伊原：私は、大学に入る前、医療学生になったら、とにかく身体がしんどい、時間がない、遊ぶ余裕もないっていう日々が続くという、マイナスなイメージがあったのですが、それでも医療を学びたい気持ちの方が強かったので、とりあえず大学に入ってみたのです。そうしたら、SOLSの活動もそうですが、意外に、自分の時間の使い方を上手に工夫することで、やりたいことを我慢せずにやる余裕が作れるなど。私がSOLSに入ったのは、一年生の秋頃なのですが、最初からいろいろ焦つて詰め込まなくとも、自分のキャパを考えながら、それに合わせて行動を決めていけばいいんだと思いました。付け加えるなら、私は医療系のTVドラマとかを観ていて、「医療が関係する学問ってかっこいいな、面白そうだな。」っていう、興味と憧れが先行してしまっていたのですが、実際、大学の講義やSOLSの活動で現場の技師さんのお話を伺うと皆さん、「人の命を救いたい、すべては患者さんのために」という気持ちが溢れていて、入学前より入学後の方が「人を救う仕事に就く」ということについて深く考える機会が増えました。

山田：今のお話を聞いていると、学問が好きなら、現場よりも研究者を目指すという選択肢もあるのかな、なんて思いました。ありがとうございます。では次、中平さん、お願ひします。

中平：私は高校浪人を経て大学に入ったのですが、なんとなく、高校をそのまま延長するような、単純な感覚で入学したら、全然違ったという感じです。高校生までは、先生から課題が与えられて、その課題を淡々とこなしていけば、それで良しという感覚だったのですが、大学生になってみると、それでは解決しない。「初歩の段階こそ、与えられるものはあるけれど、その与えられたものを最大限に活用して、自分から行動しないと得られるものも得られない」というのを実感しました。私

の大学は学生へのサポートが手厚い大学で知られているのですが、まず最初に入学したときに先生から「自分が成長したいのであれば、自分からどんどん吸収しに行く姿勢を見せないとダメだよ。」というお言葉があり、授業を受けていく中で、まさにその通りだと、肌身で体感しました。

山田：ありがとうございました。さて、私ですが、皆さんにしっかりととした考え方やご意見を持っていらっしゃるので、私が感じたギャップについてお話をさせていただこうと思ったのですが、実はあまり思い当たる節がないのです。高校を卒業してから大学に入るまでの短い期間ではありましたが、その期間に、「臨床検査技師とは何か」を徹底的に調べました。私の希望した学科は新しく創設されたものなので、1期生として入るため、大学のHPにもヒントのような記述も掲載されていなかったのです。そこで、学校は違っても、科の内容は似ているのではないかと見当をつけ、他の大学のHPをチェックして脳内でシミュレーションしていたので、実際入学して授業を受けて見ると、割と予想通りだなという感じでした。意外だったのは、学年が上がって、だんだん周囲でも就職の話題が出来るようになると「臨床検査技師が活躍する場所ってたくさんあるんだな。」ということでした。入学前は、病院か検査センターか二択・・・というイメージしかなかったのですが、一般企業でも、臨床検査技師が活躍している様子を見たり聞いたり、さらに「治験の分野」にも携わっていたり、公務員としても働けたり、保健所でも需要があると知って、この学科に入ったら、就職に苦労するんだろうかと漠然と抱えていた不安が払拭されました。この安心感は、入学前にはなかった感情です。

八木：最近は在宅医療の現場で人手が足りないから、臨床検査技師さんに、もうちょっと仕事の範囲を広げていただいて・・・なんて動きもあるみたいですから、仕事の幅が広がりつつ、需要もさらに高まってくるのかもしれませんね。

山田：一通り皆さんのお話を聞いて、SOLSの中でもここまで踏み込んだ話をすることがなかったので、いよいよ来月(第73回日本医学検査学会金沢)お逢いした時に、この座談会の経験を踏ま

えて、新しい何かが生まれる可能性もあるかもと。

八木：これからですよね。

山田：ここにいる4人は、勉強中で、プロとして現場に出て何かをするという経験がありません。でも、メンバーの中には、実習経験済みだったり、何かの資格を既に持っている方もいるので、それでもまだ、4年生を終えるまで、終えた後のことば、想像できない部分があるかなという気がします。

## テーマ④

### 就職について

八木：みなさん、もう就職の希望先は的を絞られているんでしょうか？

山田：私は、まずは大学病院に入って経験を積みたいなと思っています。でも大学病院となると、分野が絞られてしまうので、ゆくゆくはやりたいことが全部出来そうな企業も経験してみたいなど。大学の教員とかにも興味がありますし、検査センターもやりがいがありそうで、経験できる機会があれば、飛び込んでみたいです。中平さん、いかがですか？

中平：私は、超音波検査士の勉強が出来る大学病院に入りたいなと思っています。先生が常に「超音波検査士は引く手あまただから、どこの病院でも需要が高い」と仰っているので、まずは大学病院を目指し、転職となった場合でも、そこで得た経験と取った資格を活かせるようになれたらいいなと。もちろん、病院でのお仕事と勉強する時間のバランスを取るのも必要ですが、検査機器ってどんどん進化して行くので、その度に覚えなおさなきやいけないと思いつつ、興味の対象の幅が狭く深い特性を活かして、とことん一つのものを追求してゆきたいです。

## テーマ⑤

### どんなヒトが臨床検査技師に向いている?

山田：ちょっと考えていたのですが、皆さんそれぞれに、悩んだり研究したりして今ここにいる訳ですが、「こんな人はぜひ、臨床検査技師になって欲しい、こんな人は臨床検査技師に向いている」と、職業を選ぶ上で、後輩たちに伝えたいことがあつたら教えていただきたいです。まず私から言わせていただくと、検査って手先の作業がとても多いので、細かい作業が得意、器用な方は向いている職業じゃないかなと思います。

小池：私は、生物分野がとにかく好きとか、医療職に就きたいっていう気持ちのとても強い人に、来ていただけたらなって思います。医療機器の扱いもかなり緻密だったりしますので、集中力も、正確な数値を導き出すために必要な要素かなと思います。なんとなくという理由でこの分野に来た子は、途中で小さなことに躊躇と、もう勉強したくない、家に帰りたいって言いだす子も多くて、でも、この道に進むんだって強く希望してここに来た私には理解できなくて。医療の世界を仕事とするのは、考えているよりもっと大変だろうということは覚悟して来ているので、志が定まっている人の方が、壁にぶつかっても乗り越えられるんじゃないかなと思います。

山田：志もすごく大事ですよね。伊原さんは如何ですか？

伊原：私は、臨床検査技師というのは、比較的、他の医療職と比べて、資格を取った後の進路の幅が広いのではと感じていて、看護師とか理学療法士とか作業療法士とか、世の中に「資格」は数ありますけど“臨床検査技師”は就職先がほぼ病院に限定されることのない資格だと思います。就職先が病院にほぼ限定されてしまうと、私のように医療職に就きたいけれど、病院以外の場所に就職したいという方は医療職に就くことを諦めざるを得なくなってしまうかもしれません。臨床検査技師だと、その人に合わせて、企業とか検査センターとか選択肢の幅が広がっているので、医療職にご興

味のある方は、ぜひ一度、臨床検査の勉強の場に触れてみて欲しいと思います。

山田：伊原さんならではの回答だなと思いながら聞いていました。最後、中平さん、如何でしょうか？

中平：医療を目指すにあたって、自分のなかで一番大切にしているものは、「人を支えたい」という気持ちを持ち続けてゆくことだと思っています。病院に就職する場合は特にですが、現場でちょっとこころが折れそうな何かにぶつかった時に、その「人を支えたい」という信念を持ち続けることで、乗り越えられるかなと思います。私も実際の病院での実習はまだ経験していないので、わからない部分も多いのですが、私が闘病していた頃の写真をたまに見返して、大きな壁を乗り越えるためのモチベーションに繋げたいと思っています。

山田：ありがとうございます。皆さんの意見を聞いていて、そうだなってとても納得したのですが、臨床検査の分野はとても幅が広いから、まだ進路が定まっていない人も、興味のある分野があるけれど、踏み出す勇気が持ちにくいという人も、まずは思い切って踏み出してみて欲しいと思いました。

ここでみなさん、私はちょっとネタが尽きてしまったのですが、何かありますか？

## テーマ⑥

### 勉強時のお勧めのおやつ

八木：例えばですが、勉強したり研究したりするときに、ここぞというオヤツ的なものはありますか？

山田：私は、お腹が空いたら、なにか腹持ちの良いもの食べたいです。何回もつまむより、ちゃんと食べて、次にお腹が空くまで勉強に集中するというルーティンが自分の中に出来上がっています。中平：私は、コーヒーとチョコレートが大好きで、テスト勉強する時の休憩には、このコンビです。勉強で疲れた時には、糖分として補給するのも効果あるのではと思いますし、コーヒーは眠気覚ましにもなるのと、集中力を高める効果もあるそう

なので、理にかなっているのではないかと。チョコレートを食べる時はコーヒーをお供にして、単純に喉だけ渴いたらお茶ですね。

小池：私は、お菓子は食べないんですよね。大学生になってから、お菓子を食べる習慣がなくなつて、お土産などでいただく機会があると食べたりしますが、基本、お菓子より「ごはん」が好きです。一度の食事で食べるごはんの量が結構多いので、勉強中にはあまりお腹が空かない。食べるのは普通の和食とかなんですが、「こんなに食べて大丈夫か私！？」というくらい食べてしまうので、お昼ごはん食べたら夜にお腹が空かないこともあります。

伊原：私も勉強中は食べないです。不器用なのかもしれません。食べると勉強、2つを同時に出来ない。勉強の時は勉強、食べる時は食べる。でも、中平さんと同じく、コーヒーとチョコレートは大好きなので、勉強する前に食べて幸せな気分になって、それから取り組む感じです。

小池：例えば、頑張って疲れたってなったときはついつい寄り道をしてしまいます。コンビニのスイーツとか、たくさん買っちゃいます。あそこのコンビニ寄ってロールケーキ美味しいだなとか、やっぱり脳みそ使うから、欲しくなるのかな。

山田：私はあんまり大学帰りに寄り道をすることはないで、大学のある場所も関係していると思いますが、気軽に寄れるお店があまりないです。コンビニがあっても、入ったら買いすぎちゃって無駄遣いしちゃうので、できるだけ避けようと意識していることもあります。

八木：なるほど。ここでちょっと、皆さんならではのあるある的な質問をしても？世の中で人気のあるTVドラマや映画などを観ていて、イヤイヤさすがにコレはないだろう的な場面を見つけてしまうことはありますか？

小池：この前、あるドラマの場面で、臨床検査技師の方が治療薬を作るというくだりがあったのですが、治療薬の対象となる病原体が、初めて見る球菌みたいな感じで、人にそれを接種させると、心疾患になるみたいな話だったのですが、発見し

たばかりの球菌に対抗する治療薬を短時間で作れるわけないのになって思ってました。

八木：一般の方は、看護師が採血しました一検査回しました一検査結果がこうでした、って言われるのが100%当たり前だと思つてしまつて、検査値の見方は技師によって違つたりする可能性があるということを想像もしないと思うんですよね。そういう、ドラマなどで気づいたポイントなどをメモしてためると、一般の人が気づかない視点ならではの面白い企画が生まれるかもしれませんね。

山田：他になればこれで終わりになりますが、私は今回、深入りしたお話を皆さんから聞くことができたので、満足感がとてもあります。如何でしょうか？

中平：ではひとつ、さっきの小池さんの、ドラマにツッコミ入れるみたいな話なのですが。私が所属している大学は、臨床工学技士とのダブルライセンスが狙えるという特徴があります。ダブルライセンスのコースを取つていなくとも、臨床工学技士の授業を受けるカリキュラムが組まれているのですが、そんな臨床工学系のネタで、とにかく笑つてしまつたことがあったのを思い出しました。人間の心拍数は、60～80 bpm。1分間に60～80回の心拍数があるのですが、私、あいみょんというアーティストさんがとても好きで、その歌をよく聴くんです。そのあいみょんさんの曲に、「君はロックを聴かない」という歌があって。その歌詞の中に、「僕の心臓の bpm は 190 になったぞ」っていう部分があるんですけど、人が1分間に100 bpm 超えたら頻脈の区分に分類されるので、190になつちゃったら死んじやうぞって、除細動器入れなきやレベルだぞって！笑つました！

伊原：まだまだ、検査の世界については、学び始めたばかりなので、今回みなさんのお話を聞いて、勉強になることがたくさんありました。今後のSOLSの展望・・・というわけではないですが、私が高校生の時、実際の現場のリアルな声を訊く機会がなかったので、もっと自分なりに周囲にいろいろなことを発信して行けたらと思いました。まだ臨床検査の世界に踏み込んでいない後輩、高

校生たちに、情報として発信できたらいいなと考えています。

八木：自分のやりたいことをしっかりと固めて臨まないと難しいハードな職業ではあるけれど、ハマったらハマったで、とことん面白い世界もあると思うんですよね。これからも、こういう機会があれば、嬉しいです。

山田：私が入院していた子供時代は、まだ幼稚園とかだったので、記憶も定かではないのですが、去年、一か月ほど入院したことがあって、その時は、精神的に落ち込むことはなくて、むしろ学校に通えないことを悔しく思っていて。ZOOMで病室から授業を受けていたのですが、看護師さんと「検査技師を目指してるんだって?」「へー!すごいねえ!」と盛り上がったのが嬉しくて。その時の授業のテーマが脂質代謝で、コレステロール値とか、結構込み入った内容の授業だったのですが、他の職種の人たちに、臨床検査技師になりたくて、こんなことを学んでいるんだって知ってもらえたこと、励ましの声をかけて貰えたことがとても嬉しくて。普段は、入院している患者さんには見せないような私の検査値のデータをプリントアウトして持ってきてくださったりして、感激しながら、自分のデータ表にマーカーして分析したりしていました。

中平：私は、看護師さんに直接的に何か言われて、嬉しかったこととかはないんですけど、自分の入院生活で嬉しかったのは、スタッフの方々が、私

に寄り添ってくれたことです。看護師さんって、ハードな仕事柄、すごくきつい人が多いイメージがあるかもしれないのですが、入院してみると怖い人なんてどこにもいなくて、「白衣の天使」と呼ばれるにふさわしい優しい方ばかりだったので、ただただ嬉しかった、という記憶があります。

小池：私は入院した経験はないんですけど、今通院している病院があって、病院に行くときは毎回不安な気持ちを抱えて行くのですが、担当の医師の方がすごく優しくて、じっくり話を聞いてくれるので、とても安心していろいろ話せています。大学の勉強とかテストのスケジュールとかまで全部聞いてくれるんです。

山田：今回は、大きくテーマを三つに絞ったわけなんですが、そこから派生して、学校生活だったり、様々な体験だったりと、ぐっと踏み込んだあたりまで深く聞けたような気がして、SOLSとしても、もっと紹介を深められたようで、とても嬉しかったです。もし、この記事を見てくださる高校生の方がいたら、こんな世界もあるんだよって、将来の選択肢のひとつとして、臨床検査技師を入れていただけたらいいなと思いました。この現在のモチベーションを保ったまま、高みを目指して行けたらいいなと思います。